

シンガポール・マレーシア超短期派遣 2018



目次

1. 海外派遣プログラムの目的.....	2
2. 参加学生の紹介と研修日程.....	3
2-1. 派遣プログラム日程.....	3
2-2. 参加学生の紹介.....	5
3. 訪問国の概要.....	8
3-1. シンガポールについて.....	8
3-2. マレーシアについて.....	11
4. 訪問先の詳細.....	14
4-1. 南洋理工大学について.....	14
4-1-1. キャンパスの概要.....	14
4-1-2. 講義(Lecture)の講義概要.....	15
4-1-3. 研究室等見学.....	16
4-1-4. 学生交流.....	20
4-1-5. その他(キャンパスツアー).....	21
4-2. シンガポール工科大学について.....	22
4-2-1. キャンパスの概要.....	22
4-2-2. 講義(Lecture)の概要.....	23
4-2-3. SUTD 学生交流.....	23
4-3. Panasonic Asia Pacific について.....	26
4-3-1. Panasonic Asia Pacific の概要.....	26
4-3-2. 企業見学.....	26
4-4. タウンウォーク.....	27
4-5. シンガポール国立博物館.....	32
4-6. マラヤ大学について.....	33
4-6-1. キャンパスの概要.....	33
4-6-2. 講義(Lecture)の概要.....	34
4-6-3. 研究室見学.....	34
4-6-4. 学生交流.....	35
4-6-5. その他.....	35
5. その他.....	36
5-1. 食事.....	36
5-2. 町の様子.....	38
5-3. ホームビジット.....	41
6. 所感.....	52

1. 海外派遣プログラムの目的

本プログラムはグローバル理工人育成コースの下記の4つのプログラムのうち、4)実践型海外派遣プログラムの一環として実施されます。

- 1) 国際意識醸成プログラム：国際的な視点から多面的に考えられる能力、グローバルな活躍への意欲を養う。
- 2) 英語力・コミュニケーション力強化プログラム：海外の大学等で勉学するのに必要な英語力・コミュニケーション力を養う。
- 3) 科学技術を用いた国際協力実践プログラム：国や文化の違いを越えて協働できる能力や複合的な課題について、制約条件を考慮しつつ本質を見極めて解決策を提示できる能力を養う。
- 4) 実践型海外派遣プログラム：自らの専門性を基礎として、海外での危機管理も含めて主体的に行動できる能力を養う。

グローバル理工人育成コースにおける4)の実践型海外派遣プログラムのねらいは、学生を海外に派遣し、現在まで育成された能力を活用し、自身の今後の研究やキャリア形成の参考となるような経験を積むことです。

実践型海外派遣プログラムは、下記の3つの能力の育成を目指すものです。

- 1) 自らの専門性を基礎として、異なる環境においても生活でき、業務をこなす力を持ち、窮地を乗り切るための判断力、危機管理能力を含めて自らの意思で行動するための基礎的な能力を身につけている。
- 2) 異文化理解が進み、相手の考えを理解して自分の考えを説明できるコミュニケーション能力、語学力、表現力を身につけている。
- 3) 海外の様々な場において、実践的能力と科学技術者としての倫理を身に着け、チームワークと協調性を実践し、課題発見・問題解決能力を発揮して、新興国における科学技術分野で活躍するための基礎的な能力を身につけている。

2. 参加学生の紹介と研修日程

2-1. 派遣プログラム日程

日付	行動予定	訪問内容
3月7日(水)	羽田発 シンガポール着	
3月8日(木)	Panasonic Asia Pacific	9:00 講演 (over view of Asia) 10:00 社内見学 11:00 現地の若手技術者とのトークセッション 11:30 講演 12:30 社内食堂で昼食
	National Museum of Singapore	15:00 History Gallery のツアーに参加
3月9日(金)	シンガポールデザイン 工科大学 (SUTD)	10:00 SUTD 学生による大学紹介 11:15 東工大生によるプレゼン 11:45 キャンパスツアー 12:45 昼食及び学生交流 13:45 日本語クラブの学生と交流 (ゲームやクイズ)
3月10日 (土)	タウンウォーク①	9:30 - 14:00 タウンウォーク 夕方以降 ホームビジット (一部学生)
3月11日 (日)	タウンウォーク②	9:30 - 14:00 タウンウォーク 夕方以降 ホームビジット (一部学生)
3月12日 (月)	南洋理工大学 (NTU)	9:45 Chinese Medicine Clinic 11:00 キャンパスツアー 13:00 昼食及びキャンパスツアーの続き 16:30 日本語クラスとの交流 (東工大生によるプレゼン) 夕方以降 ホームビジット (一部学生)
3月13日 (火)	南洋理工大学 (NTU)	10:30 - 12:30 講義参加 Bioprinting Principles and Applications 14:00 - 15:15 研究室見学 Singapore Center for 3D Printing (SC3DP) 16:30 - 17:30 講義参加 Living with Mathematics

3月14日 (水)	南洋理工大学 (NTU)	10:00 - 11:45 研究室見学ツアー 13:00 - 14:50 SIM Tech Lab Tour
	シンガポール発 マレーシア着	
3月15日 (木)	マラヤ大学	9:30 大学内にて朝食 10:00 Welcome スピーチと自己紹介など 11:00 研究室見学ツアー 13:00 昼食 14:00 施設訪問 Institute of Ocean and Earth Sciences 15:30 Rimba Ilmu 見学
3月16日 (金)	マラヤ大学	8:00 大学にて朝食 8:00 - 12:00 4グループに分かれて講義参加 14:30 言語学科日本語専攻の学生と交流 (東工大生によるプレゼン)
3月17日 (土)	自由時間	マラヤ大の学生の案内で KLCC や china town 観光など
	クアラルンプール発 チャンギ空港トランジット	機内泊
3月18日(日)	羽田着	

宿泊地

日付	宿泊先
3月7日(水)～3月14日(水)	Village Hotel Bugis
3月14日(水)～3月16日(金)	University Malaya International House
3月16日(金)～3月17日(土)	Pullman Kuala Lumpur Bangsar

2-2. 参加学生の紹介

工学院 機械系機械コース 修士2年

リーダー

卒業する前に留学経験をしておきたいと思い参加しました。そして、日本より発展しているシンガポールと発展途上にあるマレーシアの2カ国を見られるこのプログラムに参加しました。

工学部 化学工学科 4年

サブリーダー

以前にも短期で海外留学の経験があり、日本とは違う雰囲気を直接経験することは大事なことだと思っていました。東南アジアへの渡航経験がなく、また急速に発展するシンガポールを一度自分の目で見ておきたいと思い、今回の留学プログラムに参加することを決意しました。

工学部 金属工学科 4年

プレゼン

これまで部活しかしてこなかった大学生活に何か新しい風を吹き込みたいと思い、超短期派遣に応募しました。海外への渡航経験はあまりなく、自分の英語力やコミュニケーション能力に不安もありますが、出来るだけ多くの人と交流し、多くの体験をしたいと思います。

工学部 国際開発工学科 3年

プレゼン

中国からの留学生です。先進国と途上国の両方ある留学プログラムはなかなか見かけないので、今回の留学プログラムに参加しました。メンバーの方々と向こうで出会った方々も全員優しい方です。参加して良かったです。

工学部 国際開発工学科 3年

交通・会計

今まで一度も海外に行ったことがなく、はじめて海外に行くにあたって良さそうなプログラムは無いかと探して参加したのがこのプログラムでした。写真研究部に所属しているということもあり、2カ国をまわる本プログラムで現地の学生との交流もさることながら、いい写真も撮れればと思っています。

理学部 地球惑星科学科 3年

エディター

英語に苦手意識をもっておりましたが、何かしら挑戦してみたいとの思いで今回のプログラムに参加しました。また、自分の専門の勉強をしているだけでは得られない体験をしたという思いもありました。

工学部 制御システム工学科 3年

報告会

このプログラムに参加した理由は、将来海外で働くときにシンガポールとマレーシアでちゃんと適応して生きていけるか、アジアでトップクラスの大学が実際にどのような大学なのかを知りたかったからです。

環境社会理工学院 融合理工学系 2年

交通・会計

融合理工学系にも多くのアジア圏からの留学生がいます。そのため今は海外、特に東、東南アジアに強い関心がありここを選びました。できるだけ直接現地の価値観に触れ、今後も繋がれるような人と出会うことが大きな目標でした。

情報理工学院 情報工学系 2年

エディター

以前からシンガポールに興味がありました。いったいどのような国なのか、調べるだけではわからないことを実際に行きこの目で確かめたいと思い、このプログラムに参加することを決めました。海外に行くのは今回が初めてです。

情報理工学院 情報工学系 2年

報告会

これが人生初の海外渡航でした。自分の語学力を実践で試してみるため、異文化での生活を体験するため、またグローバル理工人コース修了単位取得のために参加しました。シンガポールとマレーシアは東南アジアで今後も発展していくであろう国で、期待して参加しました。

物質理工学院 材料系 2年

プレゼン

よく西9の一階のHUB-ICSにて出役します。このプログラムに参加した理由は、同じ値段で二つの国にも行けるからです。もう一つの理由はシンガポールで働くのもありだと思っているからです。

物質理工学院 応用化学系 2年

エディター

このプログラムに参加した理由は、1つのプログラムで2か国に行くことが出来るからです。また、去年はフィリピンのプログラムに参加したので1年間での自分の成長を感じられれば良いと思いました。世界大学ランキングでアジアトップの大学を見学できることも魅力です。

第1類 1年

交通・会計

今回このプログラムに参加したのは早い時期から海外経験をしてみたいと思っていたのと実際に現地の人と英語で話すことで自分の英語能力を知り今後の指標としていきたいと思ったからです。これからも積極的にこのような留学プログラムに参加していきたいです。

第6類 1年

交通・会計

ゴルフ部、サイテクに所属。アジアの中で経済的にも学力的にも発展していて、友達が旅行に行ってすごくよかったと言っていたシンガポールに前々から興味があったので、参加しました。

3. 訪問国の概要

3-1. シンガポールについて

(1) 地図、面積

シンガポールはマレー半島の南端、赤道から 137km 北に位置する大小 50 以上の島々からなる東南アジアの島国である。面積は 720km²で東京 23 区の面積(620km²)とほぼ同じ。正式国名はシンガポール共和国で首都はシンガポール。



(2) 人口、民族構成

人口は約 561 万人で、そのうちシンガポール人や永住者は 397 万人。(2017 年 6 月)人口に対して国土面積が狭いため、人口密度は世界第二位の約 8000 人/km²となっている。シンガポールには長期滞在している外国人が 160 万人と多く全人口の 30%を超えている。また、シンガポールの民族構成は中国系が 74%、マレー系が 13%、インド系が 9% (2017 年 6 月)となっており、様々な民族が生活する多民族国家である。

(3) 言語

英語、中国語、マレー語、タミル語が公用語として認められているが、実際には共通語として英語が使われることが多い。英語より簡易的で独特なシングリッシュが使われることもある。英語だけでなく人々は自分の属する民族の言語も学んでいるため複数の言語を話せる人が多い。

(4) 宗教

仏教、イスラム教、キリスト教、道教、ヒンズー教等が信仰されており、それぞれの宗教に関する寺院などの建造物も多く存在する。

(5) 地理(気候、時差)

シンガポールは高温多湿の熱帯モンスーン気候に属しており、一年を通じて寒暖の

差がほとんどない。頻繁にあるスコールは強風や落雷を伴うが1～2時間程で止み、止んだ後は涼しくなる。日本との時差は-1時間でサマータイムはない。日本からシンガポール・チャンギ空港へは直行便で6～7時間ほどかかる。チャンギ空港は東南アジアのハブ空港としても機能している。通貨はシンガポールドルが使用されており、1シンガポールドル=約81円(2018年2月)である。

(6) 政治体制

政治体制は立憲共和制であり、議会は一院制である。元首は任期6年の大統領であり、現在は第8代ハリマ・ヤコブ大統領(2017年9月就任)である。議会での任期は5年で選出議員数は89であるが、人民行動党 PAP が圧倒的多数の議席を維持しており、PAP のリー・シェロン氏が首相を務めており、内政は安定している。

(7) 産業等の基礎情報

主要な産業はエレクトロニクス、化学関連、バイオメディカル、精密機械などの製造業と商業、ビジネスサービス、運輸・通信業、金融サービス業である。また貿易について主な輸出相手国は中国、香港、マレーシア、インドネシアであり、輸入相手国は中国、マレーシア、アメリカ、日本である。シンガポールでは水資源に乏しくマレーシアからの輸入に頼っていることが知られている。貿易額では、輸出額が輸入額を上回る貿易黒字を維持している。

(8) 経済的特徴

1965年にシンガポール共和国として独立後、インフレと失業問題を抱えていたが、税制上の優遇措置や輸出入の自由保障などの政策を行ったことにより、多くの外国籍企業の誘致に成功し、多大な経済発展を遂げてきた。2017年の実質GDP成長率は3.6%であり、緩やかではあるが現在も成長を続けている。

(9) 文化的特徴

15世紀に現在のシンガポールの領域にマラッカ王国が建国された。マラッカ王国は国際貿易の中心であり、多くの中国人がやってきて、中国とマレーの文化をベースとしてアジアやヨーロッパの文化を折衷させた独自の文化(プラナカンの文化; ニョニャ文化)が創り出されて繁栄していた。しかし16世紀初頭にポルトガルの侵攻によりマラッカ王国が滅亡するが、マレー半島北部に移ったジョホール王国によって再び支配されることになる。19世紀にトーマス・ラッフルズが上陸しジョホール王国の許可を受けて商館が建設され、間もなくイギリスの植民地となるが、太平洋戦争が激化した1942年～1945年は日本軍により占領されていた。1959年にイギリスから自治権の獲得に成功する。1963年のマレーシア成立に伴ってシンガポール自治州もその1州として含まれることになったが、1965年にマレーシアから分離してシンガポール共和国として独立した。

マラッカ王国時代に多くの中国人がやってきたことにより中国特有の文化が栄えるとともにマレー文化と融合したニョニャ文化も繁栄した。また、19世紀頃アラブ人や

インドネシアのスラウェシ島に住んでいた海洋民族であるブギスの商人たちがやってきたことによって商業の街として栄えた。19世紀頃にはイギリスの植民地政策により南インドから移住してきた人が住み着くようになってインド文化が栄えた。プラナカンの街並みやチャイナタウン、アラブストリート、リトル・インディアは移住などの歴史の名残を顕著に表しているものであるといえる。

(10) 社会的特徴

シンガポールは多民族国家であるため、これを統一するために様々な法律や規則が定められており、違反すると罰金が科せられることもある。ごみのポイ捨て、喫煙場所以外での喫煙、電車(MRT)内での飲食などに罰金が科せられる。公共の場所における時間外(22:30~7:00)の飲酒または酒類の購入、武器の所持などは法律で禁止されている。入国時のチューインガムの持ち込みや麻薬の持ち込みは厳しく罰せられる。

(11) 日本との関係

日本とシンガポールは1966年に外交関係が樹立されて以後、様々な分野において交流が行われており、人々の往来も活発に行われていて、政治的な問題もなく両国関係は良好な状態にある。貿易も盛んにおこなわれており、航空協定や租税協定、経済連携協定などの二国間の協定も結ばれている。

3-2. マレーシアについて



- 1) 国土面積
330,338km² (日本のおよそ9割)
国土の約60%は熱帯雨林に覆われている。
- 2) 首都
クアラルンプール
- 3) 人口
3,119万人 (2015, マレーシア統計局)
- 4) 言語
国語はマレー語で、中国語、タミール語、英語も使用される。異なる民族間では英語を使うことが多く、旅行者は英語で会話できる。大学の講義は英語であることが多く、我々の聴講した講義も英語である。
- 5) 通貨
マレーシア・リングgit (RM), マレーシア・セン (SEN)
1リングgit=100セン
1リングgit=約27円, 2018年3月
- 6) 民族
マレー系約67%, 中国系約25%, インド系約7%
- 7) 宗教
国教はイスラム教。信仰の自由が認められているため、仏教、ヒンドゥー教、キリスト教、道教、シーク教を信仰する人も多い。
イスラム教国ではあるが旅行者に対する飲酒の制限はない。また、服装についても制限はないが、コタバルなど一部地域では宗教色が強いため、露出を控えた服装をするべきである。また、モスク、寺院でも同様である。
- 8) 政治
政体は立憲君主制である。国王の任期は5年で、各州の統治者からなる統治者会議で互選される。現国王のムハマド5世は15代目で、クランタン州(マレー半島北部にあ

る)のスルタンである。国王に実権はない。政府には首相がおかれ、議会は二院制である。2008年3月の総選挙では独立以来政権を担ってきた与党連立が議席を大きく減らし、当時のナジブ副首相が首相になった。2013年5月の総選挙で与党連立が議席数は微減したものの勝利、首相は再任となった。

9) 略史

15世紀初めにマラッカ王国が成立した。16～17世紀にポルトガル、オランダ東インド会社による支配が行われ、1824年に英蘭協約によってマレー半島とボルネオ島西北部がイギリスの勢力下におかれ、イギリスによる植民地支配が始まった。その後、第二次世界大戦中、1942年～45年は日本軍の占領下におかれた。戦後、1948年に英領マラヤ連邦が形成され、1957年に独立を果たした。その後、1963年にシンガポール、サバ、サラワクを加えてマレーシアが成立、2年後にシンガポールが分離・独立して現在に至る。

10) 地理

マレー半島南部とボルネオ島北部がマレーシア領である。時刻はGMT+8時間である。シンガポールと同様に高温多湿で、雨季と乾季がある。

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
最高気温 (°C)	33	34	33	34	34	34	33	33	33	33	32	32
最低気温 (°C)	25	25	25	26	26	26	25	25	25	25	25	25
湿度(%)	77	79	79	79	77	69	74	74	75	80	84	84
降水量(mm)	232	364	263	225	313	23	164	92	141	459	684	455

クアラルンプールなどマレー半島西海岸では5～9月は雨季であるが、旅行への影響は少ない。一方、東海岸や東マレーシアでは、11～3月が雨季で、この時期は雨が激しく、ホテルが閉まっている場合もあり、注意を要する。

11) 文化

マレー系、中華系、インド系を中心としたいくつもの民族が共存する多民族国家である。しかし一方で、政府の進めるブミプトラ政策によってマレー人が優遇される状況が続いており、円満な共存が実現しているわけではない。そもそも、移民が多く、中華系人とマレー人の経済格差に端を発する対立が昔から根強く、これがシンガポールの分離・独立につながったわけだが、この解消策として打ち出されたのがマレー人を優遇するブミプトラ政策であった。しかし結局はこの政策が新たな対立を生み、またもともと無関係なインド系民族もマレー人よりも冷遇されるためその反発もある。

12) 経済

2016年の1人あたりGDPは9,360USDで、上位中所得国と呼ばれる。物価は日本やシンガポールよりかなり安い。主な輸出入相手国はシンガポールと中国、次いで日本とアメ

リカである。また、イスラム圏の国としての地位は相当なもので、政府機関がハラール認証を行っており、ハラール製品の取扱でも強い。主要産業は製造業、農林業、鉱業である。原油、天然ガス、レアアース、錫などの天然資源の採掘ほか、天然ゴムの栽培も行われている。特に鉱業では錫採掘が中心となっている。

13) 軍事

徴兵制ではなく志願制で、正規軍 10.9 万人(陸軍 8 万人、海軍 1.4 万人、空軍 1.5 万人)である。1960 年からは積極的に PKO 活動に参加している。

14) その他

- 入出国の際に両手人さし指の指紋認証がある。
- 日本旅券を所持しており、有効期限が半年以上残っていて、なおかつ帰路または次の目的地への航空券を所持している場合には、観光・商用目的の 90 日以内の滞在でビザは不要である。
- 水道水は飲用不可。煮沸すれば飲用可能だがミネラルウォーターを購入するのが望ましい。
- マレー半島からボルネオ島に移動する場合には国内であってもパスポートチェックがある。

4. 訪問先の詳細

4-1. 南洋理工大学について

4-1-1. キャンパスの概要

シンガポールの都市部から離れた南西部に位置する国立大学です。敷地面積は 200 ヘクタールで、東工大の約 8 倍もの広さです。また、そのうちの半分を職員や学生が生活している寮が占めています。そのため、キャンパスが一つの町のような機能を兼ね備えており、レストランやカフェから美容室、アパレルショップが軒を連ねます。キャンパス内には多くのバス停があり、無料のバスで効率的に移動することができます。他にも、ユニークな建造物が数多く存在します。その代表例として HIVE があります。HIVE は「蜂の巣」「活気のある空間」という意味があるように、学生のグループワークを奨励するようなことを目的としてつくられた建物です。日本とは違い、地震の少なさがユニークな建築を可能とさせてくれているようです。



ハイブの外観



ハイブの内部

4-1-2. 講義(Lecture)の講義概要

今回参加した授業はどれも撮影されているので学生数はかなり少ないです。学生としてはいつでも、どこでも授業を受けるができるのでありがたいやり方です。主の学生は小テストか期末だけ現れるそうです。

• Bioprinting principles and applications

生物系にとってもかなり新しい分野のバイオプリンティングについての講義でした。今回の授業は特にバイオプリンティングに使える細胞の種類について話してくれました。分け方によって大まかに3項目があり、それは細胞のソース、細胞のポテンシャル、細胞のフォーマットでした。高校生物で聞いたことある内容なので、専門用語以外に苦労せず理解できました。

• Living with Mathematics

数学の講義だった。方程式が解をもつかどうか、そして解をもつ場合どのようにして求めることができるのかについて説明していた。今回は二元一次方程式の連立方程式についてだった。係数は実数であるとする、この連立方程式は一般に実平面上の2直線(two lines)に対応する。このことについて先生は学生に問いかけた。だれも答えようとする人がいなかったのが私に答えた。この講義を受講する学生は意外と静かだとこのときは思った。それから連立方程式の解はこれらの2直線の交点(intersection point)に対応する。このことについても先生は問いかけた。するとあちこちから思い思いの答えを発言する声が聞こえた。私は安心した。2直線が平行な場合に限り交点が存在せず、連立方程式は解をもたない。解をもつ場合の解の求め方として加減法と代入法を紹介していた。多くの文章問題を例に立式の発想と解を求める具体的な手順を説明していた。実際、理系の私たちからすると中学校2年生の学習範囲であったから既知の内容であった。しかしその講義を英語で受けることには新鮮さがあった。前面の2つのプロジェクターのうち1つを講義資料ではなく先生の手元のライブ映像に切り替えるとき、先生は学生に「だれかこっちの画面を録画している人はいるか」と尋ねていて、先生の学生に対する配慮が見られた。

文系理系を問わずどの専門の人でも日常生活に役に立つ数学だと感じた。

• Bioprinting class at NTU

細胞の話を中心とした生物系の授業だった。正直に言うと、専門用語がわからなすぎてほとんど理解できなかった。理解できた範囲を少し紹介すると、細胞のいくつかを分類してそれぞれの特徴を説明していく授業であり、Autologous cells (自家細胞)の利点は、感染リスクがないことであり、欠点は限られたドナー部位でしか利用できないことなどを学習した。NTUの学生は3~4人しか受けておらず、他の学生は授業動画を視聴して勉強するようだ。授業中にパンを食べている学生もいて、自由な授業空間が印象的であった。

4-1-3. 研究室等見学

・SIM Tech Lab Tour

前半はシンガポールの実態と SIM Tech の概要についてデータとともに説明していただいた。シンガポールは天然資源がほとんどなく、輸入に頼っている。GDP のうち製造業は 20% を占めており、シンガポールの産業において重要なものであることがわかった。ちなみに日本では規模は大きいものの 18% である。SIM Tech は新しい製造技術を研究開発すること、そして次の世代の人材を育成することを目指している。特許の取得に対しても積極的だ。インターンシップのような制度もあり、一定の期間 SIM Tech の仕事をしながら研修を受ける学生もいる。金属の成型、切削、表面の研磨など製造業で基本的な機械加工の技術についても研究している。

後半は大型の機械を実際に見ながら説明していただいた。金属、ポリマー、3D-Printing に関する機械が多く設置されていた。シンガポールは国としてどの分野に力を入れるかを示しており、研究開発の予算をつぎ込んでいる。したがって他の研究所との競争の中で研究資金を確保するためには国の計画とリンクさせる必要がある。SIM Tech は材料軽量化、部品軽量化、生産性向上、製造管理システムなどに力をいれている。



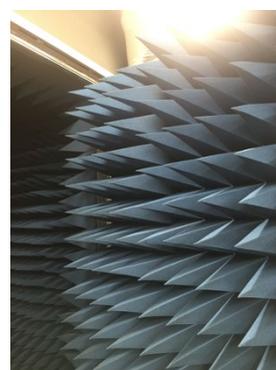
シンガポールが多くの研究開発費をつぎ込んでいることがよくわかる。

・NTU ラボ見学

NTU では、4 つの研究室を見学させていただいた。今回お邪魔したのは School of Physical and Mathematical Science。正直内容はどれも難しかったので、簡単な概要だけ紹介したいと思う。自分の専門外の内容ばかりであったのでなかなか理解が追いつかなかった。4箇所を回り、この報告書をまとめる中で最も強く感じたのは、最先端のサイエンスは英語で動いている部分が非常に大きいということだ。この分野で学んでいく上で英語は避けて通れないものであることを改めて痛感した。以下、4つの研究室紹介。



最初に訪れたのは磁気関連の研究室。(A/P [S. N. Piramanayagam](#) (Prem))。光学像は表面上に塗布された酸化物の厚みに強い影響を受け、グラフェンは白色光下で強いコントラストを示すことから、磁気をうまくコントロールしより精度の高いもの(Few layers graphene, FLG)に挑んでいるらしい。



無響室

次に訪れたのは、電磁波の理論を研究している研究室 (A/P [Zhang Baile](#))。部屋に入ってまず目に飛び込んできたのは無響室だった。現在の研究では、高速の電子が引き起こすプラズモンの拡散伝達を利用した表面プラズモン構造による位相の保護を目指しているらしい。

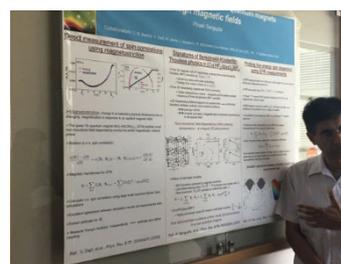
3つ目に訪ねた研究室

3つ目に行ったのは、エネルギー材料やエネルギー貯蔵、半導体の構造をナノレベルで研究している研究室(A/P [Fan Hongjin](#)、左)。土足のままではダメで床のいたるところに粘着ゾーン(ゴミを取る)があった。解析の様子 DEMO も見せてもらった。



最後の研究室は中を見ることはできず、ポスターの前での解説(A/P Pinaki Sengupta)となった。量子の相転移や相関に関する分析、計算を行なっているらしい。基礎理論は一部学んでいる内容があり多少理解できた。コンピューターを利用した大規模なシミュレーションにより新たな理論的枠組みの構築を試みている。

解説してくださる Mr. Pinaki



• Chinese Medicine Clinic

NTU に到着後まず向かったのが本施設である。ここでは東洋医学の思想を用いた治療を行っている。西洋医学は患者の人体を部分的に捉え、悪い箇所があったらその部分だけを取り除いたり、治療を施すが、東洋医学では体の状態は陰と陽で構成されており、その二つが相互作用し、バランスが取れた状態を健康とみなし、片方が過剰になったり不足したり、バランスが崩れることで病むと考えている。今回はCMC 職員の Lim Yin Jia さんがまず Yin(陰)と Yang(陽)、Qi(氣)と Blood(血)の考えを説明してくれた他、舌の色を使った健康診断の方法や、ツボをおす治療法といった実用的なことを紹介してくださった。例えば自分は当時腹痛に襲われていたが、言われた通り左ひざの下あたりのツボを押したら少しマシになったような気がした。その後、Lim さんがみんなの前で鍼や吸角といった治療に使う道具の説明をしてくれた。実際に学生の腕にガラス容器をのせて、吸角の体験をすることができた。その後、CMC 内の展示スペースに移った。そこでは東洋医学で薬として使われている材料が多くて飾られていたが、草や木の実といった植物の他、動物の骨、昆虫、幼虫、石まであり多種多様であった。



施設入り口にある展示スペース。中には触ったり嗅いだりできる展示品もあった。

• Singapore Center for 3D Printing at NTU

3Dプリンターは皆さんご存知の通り、石膏や金属等の粉を層状に積み重ねることで立体的な構造をデータから実体に模写する装置である。日本でも簡易的なものは商品化されつつあるが、本研究所は数千万~1億円もする高額な3Dプリンターを多数所持し、3Dプリンターの技術的開発及び3Dプリント技術の持つ可能性について世界最先端で研究を進めている。まず装置の見学の前に Assistant Director の Mike Goh さんに簡単にラボと3Dプリント技術について紹介してもらった。特にレクチャーの中で、3Dプリントで構造を作ることで、部品の量を減らし、材料の節約につながることは重要なことだと感じた。その後、実際に機械がおかれているラボに行った。樹脂を用いた3Dプリンターはたびたび見聞きするが、チタンを用いた3Dプリンターは新鮮に感じた。また、機械の数もかなり多く、充実した環境であることがうかがえた。



3Dプリンターで作ったマーライオン。細かいものだけでなく、50~60 cmくらいのものも作成可能だ。



金属製品を作れる3Dプリンター。お値段は1億円以上するとか。

4-1-4. 学生交流

NTU で日本語クラスを受講している学生と一緒に日本語の授業を受けた。授業では、NTU の教員だけでなく、東工大生もカタカナ語の発音の違いや小さい「つ」がどこにはいるかなど、NTU の学生がわからないことを中心に教え、交流を深めていった。授業の後半では、東工大についてのプレゼンをして NTU の学生に東工大の基本的なことを知ってもらった。最後はNTU と東工大生がお互い相手に聞きたいことを3つずつ質問し、それらを答えて、両国の文化の違いや考え方などに関しての理解を深めていった。短い時間ではあったが、お互い楽しみながら交流することが出来たと思う。授業後に連絡先を交換する機会があったが、シンガポールでは、ほとんどの学生が Instagram を利用しており、あまり Facebook は使っていないとのことだった。マレーシアに訪れた際も連絡先を聞かれたときは、まずは Instagram をやっているかと聞かれたので、来年のプログラム参加者はぜひインストールしておくことをお勧めする。(Instagram を使っている日本人参加者が極端に少なかったのは、東工大生だからかも?)



東工大についてのプレゼン



日本語クラスの生徒との集合写真

4-1-5. その他(キャンパスツアー)

漢方薬の見学の後、私のグループに二人のNTU女子大学生が担当になって、案内してくれました。彼女たちの学科を聞いたところ、二人とも文系であることが分かりました。後程も商学部や法学部の建物を見えましたが、南洋理工大学(名称だけでは誤解しやすい)は東工大のような理系大学ではなく、総合大学であることが分かりました。元々は技術系の学校だったらしいですが、激しい男女比がもたらす結婚事情を和らげるために文系の学部を導入したと言いました。うらやましい限りです。

ノーススパイン(North Spine)にあるLee Wee Nam図書館に行きました。南洋理工に図書館は六つもありますが、その中Lee Wee Nam図書館は理工系の図書館で、ガイドの二人はもちろん滅多に行かないです。二人の落ち着いていない視線からも分かってしまいます。六つの図書館もあるのに、Lee Wee Nam図書館はかなり広く感じます。わたしは南洋理工の規模の大きさに驚きました。しかし隣の間中先生はこう言いました。「シンガポールに六つの国立大学しかないのよ。それに比べて日本の国立大学はいくつもある。国からの経費は段違いだからしょうがないのよ。」おっしゃる通りだと思いました。その後屋外プール(無料)、トレーニングセンター(何個もあって無料)、学食(とにかく種類が多くて安くておいしい)なども回ってきましたが、どれも東工大にもあったらいいのになぁと思いました。

お昼はなぜか違う人と食べることになっていました。よって待合の食堂に行ったら二人の女子とお別れで、待っているのはカナダからの交換留学生Davidでした。彼はアジア系の人(お爺さんお婆さんは中国人)ですが、生まれ育ちはずっとカナダかアメリカなので(英語のアクセントからも分かってしまいます)、アジア文化を体験したくてシンガポールに行ったのですが、シンガポールの欧米化は想像以上進んでしまっていて、がっかりしたと言いました。すごくおいしいAyam penyet(南洋風フライドチキン、ソースは結構辛い)をいただいているうちに、台風並みの大雨が降ってきましたが、まもなく止みました。熱帯雨林気候を体験できました。その後、Davidは6缶パックのビールを買って、学内の無料シャトルバスに乗り、The Hiveで飲みながら雑談を続けました。彼は近々品川のマイクロソフトでインターンシップを始めると言いました。彼と東京で再会するのが楽しみです。ちなみに間中先生は仕事なので、ビール一滴も飲みませんでした。仕事熱心な立派な先生です

4-2. シンガポール工科デザイン大学について

4-2-1. キャンパスの概要

2015年に現在の Changi キャンパスに移転した。最寄り駅は、Downtown MRT Line の Upper Changi Station である。図1に示すように、キャンパスは主に Main Campus, Housing blocks, Sports and Recreation Centre の3つのエリアに大別できる。

Main Campus では主に授業や実験が行われている。FAB LAB と呼ばれる工作センターには様々な種類の工作機械が数多くあり、その中には3Dプリンターやレーザーカッターといったものもあった。また、学内の至るところにそれらを用いて作製した作品が置いてあった。そのうちの一例を図2に示す。

Sports and Recreation Centre にテニスコートやグラウンドといった様々なスポーツ施設がある。試験前休みなのもあつてか、学生はあまり見られなかった。現地の学生が言うには、日中は暑いいため、スポーツをするのは夕方になってからとのこと。



図1. Changi キャンパス全体の上空写真



図2. 作品の一例 (カビゴン)

4-2-2. 講義(Lecture)の概要

SUTD では講義がありませんでしたが、SUTD の紹介が Ms. Evelyn Tan、Mr. Ong Ai Ling、Student Government の 3 名からされました。

SUTD の紹介は Ms. Evelyn Tan のおおまかな概要から始まりました。私は事前学習会の一環で SUTD について調べていたので多少知っていたのですが、カリキュラムなどについてそれ以上のことを知ることができて有意義でした。次に、Mr. Ong Ai Ling から大学院の紹介がありました。英語を聞き取るのが苦手なことに加え、大学院についてよく知らなかったので、あまり理解できませんでしたが、SUTD には様々な奨学金制度があることなどが分かりました。その後、Root という学生自治団体の学生から、Root の紹介と Fifth Row (部活動) の紹介がありました。冗談をまじえながら紹介してくださったので、楽しく拝聴することができました。

4-2-3. SUTD 学生交流

まず、SUTD の学生の担当者の方々によるキャンパスツアーがあった。講義室や図書館、東工大でいうところのものづくりセンターのような施設、ジャッキー・チェンが寄贈したという知音閣などを案内していただいた。ちなみにこの知音閣、SUTD の学生からは「ジャッキー・チェン・パビリオン」と呼ばれているんだとか。

その後、日本語クラブの学生とランチを食べ、交流を行った。シンガポール人特有の英語であるシングリッシュやシンガポールについてのクイズをしたり、シンガポールの伝統の遊びである Five Stones (お手玉のように砂の入った袋を投げてキャッチする)、Pick-Up Sticks (将棋の山崩しのように積み上がった竹棒の山から周りの棒を動かさないように棒を取っていく)、Chapteh (羽つきの羽のようなものを蹴りあう) の体験をしたりした。

日本語クラブの学生は会長をはじめ非常に積極的な学生が多く、非常に楽しく有意義な交流ができた。この日の交流の後にも個人的に食事や観光に行ったり、我々がシンガポールからマレーシアに発つ日にチャンギ空港まで見送りに来てくれたりする学生もいた。

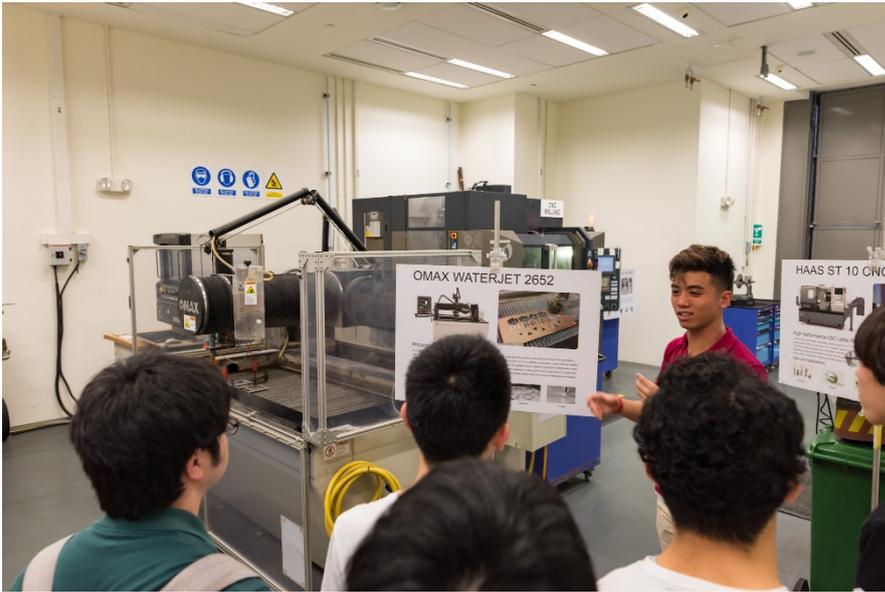


図 キャンパスツアーの様子



図 知音閣



図 集合写真(日本語クラブの皆さんと)

4-3. Panasonic Asia Pacific について

4-3-1. Panasonic Asia Pacific の概要

訪問先の企業の概要(本社ホームページ)

<https://www.panasonic.com/sg/>

社名:パナソニック株式会社

創業:1918年

代表取締役社長兼社長執行役員 CEO:津賀一宏

業種:電気機器



パナソニック・シンガポールのエントランスの様子

4-3-2. 企業見学

今回の派遣留学ではパナソニック・シンガポールへの企業見学を行った。お忙しい中、現地社員の方々に時間割いていただき、朝早くから訪問させていただいた。パナソニックは今年創業100周年を迎え、様々なイベントを執り行っているようだった。

パナソニック・シンガポールは主に、東南アジア地域における拠点のような役割を行っている。周辺諸国の支店の統括を行いつつ、どういった戦略をとっていくかを、膨大なデータや現地で得られた知見を生かし決定する重要な役割を担っている。また、アジア地域での新規事業の戦略立案も行い、先端技術の開発を行っている。パナソニックは2008年松下電器産業からパナソニックに改名し名前を統一した。ブランドスローガンを”A better life, A better world”とし、一人一人の生活スタイルに合わせた製品作りを目指している。パナソニック・シンガポールは、その事業業種形態から4カンパニー制をとっている。名称としては家電を対象としたアプライアンス社、リフォームを主に対象としたエコソリューションズ社、プロ用AV機器を対象としたコネクテッドソリューションズ社、そして自動車関連の部品を対象としたオーチモティブ&インダストリアルシステム社となっている。縮小する日本とは対照的に拡大するアジアに集中し、多くの事業開発機会を狙っていると聞いた。しかし、アジアでの事業を展開する上で重要となるのが為替動向である。アジア地域の通貨は価値が低い傾向にあり、利益を得るために様々な戦略が必要となるようである。土地や燃料等の資源が少ない状況において、シンガポールが生き残っていくために日本でのビジネスノウハウを取り入れ、政府と協力しながら顧客へより便利な生活を提供しようとする姿勢に感服した。

4-4. タウンウォーク

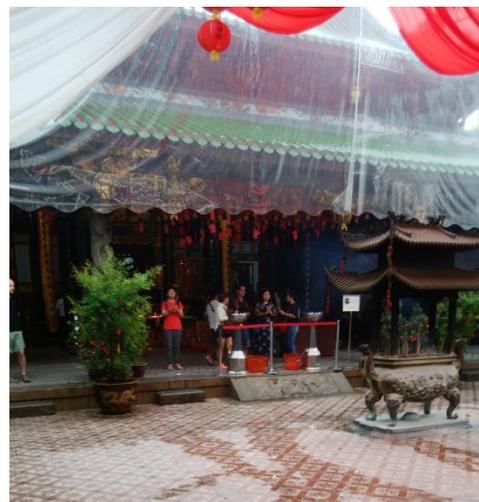
・グループ1

SweeLin さんが半日にわたり案内してくださった。バスで5分ほど揺られた後に、チャイナタウンの散策を行った。チャイナタウンにはお店と家が一体化したショップハウスが一般的らしい。昔ながらの形態や西洋の文化を取り入れたものや柱をデコレーションしたものもあった。また、縁起の良い牡丹や不死鳥が数多く描かれていた。次に Thian Hock Keng Temple を訪れた。この寺は釘を使用していないという特徴があり、日本の寺との共通点が見られた。幕がツバメのように波状になっており、穏やかに過ごせるように願いが込められているらしい。この寺には観音様もおり、隣には異なる宗教の建物があつた。異なる文化が混在しており、お互いを尊重し合う姿勢が感じられた。歴史を知ると共にシンガポールならではの面白さを感じることができた。

昼食にクイズをやりながら KAYA トーストを食べた。KAYA トーストは卵、ココナッツミルク、パンダンリーフ、砂糖から作られる KAYA ジャムとバターを挟んだパンでシンガポールでは大人気。暑い国では栄養補給のため甘くてしょっぱいものが多いということがわかった。次は Yueh Hai Ching Temple という世界遺産の寺を訪れた。縁結びとして有名な寺で、女性が数多く訪れていた。そしてシンガポール川を訪れてシンガポール石を発見した所を確認した。最後に CityHall でラッフルズの銅像を拝見し、テラスから SweeLin さんオススメの風景を拝ませてもらった。マリナーベイなどの観光スポットが一望できる場所で景色は最高だった。歴史や文化を楽しく知ることができた。SweeLin さん、本当にありがとうございました。



Shop-House



Thian Hock Keng Temple



Yueh Hai Ching Temple

・グループ2

1. Bugis



Bugis の街です。写真の真ん中の建物は昔がカトリック教会で、今は美術館です。



ショッピングセンターの近くの写真です。この船のマークの意味は大昔、エンジンがまだ発明されていない時代に、東南アジアで貿易のために活躍していた商人達の船を表しています。

2. Central Street

この街の名前は日本人より作られました。意味は中央通りのままです。ここは1835年代で日本人が集まり始めた場所です。



街にある一つのカトリック教会です。今も使われています。訪ねた日は日曜日だったので、礼拝がありました。そのため、中に入ることはできませんでした。残念でした。

3. SMU(Singapore Management University)



これはシンガポールマネジメント大学です。略で SMU です。シンガポール国立博物館と近いです。

4. Waterloo Street



Waterloo Street におけるシンガポール美術館です。以前はカトリック系の男子校でした。道路の向こう側は女子校でした。



この建物は中国書道をやっているところです。子供向きの書道、大人向きの書道、老人向きの書道も用意されています。普通の書道だけでなく、小学校程度の読解と作文も指導しています。

観音寺です。隣に実はインドのお寺もあります。二つの寺はなんだか仲がいいので、お互いに祭りの形を融合しています。例えば、インドの寺もお線香をやっていて、観音寺が花の礼拝もできます。



以上は Bugis 附近での town walk の話です。一度現場に見に行く事を勧めます。

4-5. シンガポール国立博物館

Panasonic R&D Center Singapore の最寄駅 Bedok 駅 から電車を乗り継いで約 40 分、Bras Basar 駅から歩いてシンガポール国立博物館に向かった。

右の写真が外観である。入館料は 15 S\$。この博物館は全体を見ようとすれば 1 日経ってしまうような広さらしいが、今回私たちが見学したのは主に History Gallery と Story of the Forest の二つである。

History Gallery を案内してくれたのは、安達ジェイさんである。後、に過去に日本の東進ハイスクールで数学の教鞭をとってらっしゃったと判ったのだが、ジェイとだけ名乗って英語で案内してくださったものだから気づかなかった。ジェイさんはまず、シンガポールがどう生まれ、シンガポールと呼ばれるようになったのかを話し始めた。その後、辛亥革命で知られる孫文の活動の拠点になったこと、日本に占領されその後の粛清による犠牲者の人数は分かっていないことなどを聞いた。ジェイさんが特に熱を込めて解説してくれた（ように私を感じた）のは、マレーシアからのシンガポールの離脱であった。どうして当時の人民行動党 (PAP) のリーダーであるリー・クアンユーは離脱を選択せざるを得なかったのか、そしてその後、主な産業が蚊取り線香や蠟燭しかない状態からの国づくりをいかに成し遂げたのかを知ることは、私にシンガポールに対する新たな視点を授けてくれたような気がする。

ガイドとして同伴してくださっていたもう一人の女性のおすすめで、Story of the Forest というブースを見に行った。シンガポールの動植物をテーマにした展示で、螺旋状に 170 メートルほど続く展示を鳴き声や雨の音に包まれながら歩くという壮大なものであった。これは、日本の猪子寿之氏率いるウルトラテクノロジスト集団、チームラボの作品であり、サウンドも日本人が手がけているのだそうだ。



博物館の外観

(https://www.howtravel.com/wp-content/uploads/2015/10/slick_National-Museum-of-Singapore-1080x720.jpg)



シンガポール離脱を解説するJさん



4-6. マラヤ大学について

4-6-1. キャンパスの概要

マラヤ大学(マレー語では Universiti Malaya)は、マレーシアで最初の大学で、公立の大学である。1949年に設立され、首都クアラルンプールの南西に位置する。キャンパスの敷地面積は3.0平方kmで東工大岡山キャンパスの約12倍である。今回宿泊させてもらった学生寮からは車で20分程度であった。キャンパスの図を示す(マラヤ大学のホームページからの引用)。マラヤ大のキャンパスの中心には Rimba Ilmu という熱帯植物園が広がっており、それについては次に説明する。キャンパス内の建物は図の紫のドットを見るとわかるように、学部ごとに分けられている。敷地内の移動は車で送迎をしてもらい、食事、アイスブレイクなどは THE CUBE という会議室のみを使ったのでキャンパス全体の建物の配置や普段学生が食事をとるところに行く機会はなかった。



4-6-2. 講義(Lecture)の概要

マラヤ大の講義に我々は4つのグループに分かれて参加した。4つの授業の内容はIndustrial Ergonomics, Momentum Transfer, Structural Steel Design, Computer and Data Communicationであった。この中で私は移動現象を中心としたMomentum Transferの講義に参加した。講義の内容はナビエストークスの式を使いこなす練習であった。先生がさまざまな条件下の流体を提示し、その図に対して計算をする方式であった。講義室は日本の大学の講義室と大差なかった。驚くことにマラヤ大では講義室の真ん中の前半分を学生が席を埋めており、先生から離れた席から埋まっていく日本との違いを感じた。先生の授業の仕方も積極的に学生に答えを口頭で求めるようなことが多く、前の方の座席の学生が口頭で答えていた。先生が学生と積極的にコミュニケーションを取ろうとしていた面でも日本との違いを感じた。講義中に寝ている学生は見当たらなかったがスマホをいじっている学生は後ろの方の席で見受けられた。

4-6-3. 研究室見学

訪ねた研究室の中で土木系のコンクリートの研究所と化学工学系のプラントの研究所を紹介する。コンクリートの研究所ではヤシの殻からコンクリートの材料を作り、砂と混ぜて強度のあるコンクリートを作る実験を行っていた。工場に案内されると、大量の円柱型のコンクリートが液体の中に沈められているのが目に入った。コンクリートは生成したばかりは500℃程度にまで及ぶので水で長時間冷却する必要があるらしい。

プラントの研究室では工場のような大きな建物内に何本ものパイプが通っていた。研究室では窒素、水素、炭化水素を用いて温度、触媒の量を変化させたときの反応について研究していた。実験装置の横にはコンピューターがあり、難しそうなプログラムで反応速度の研究も同時にしていた。私の専攻が化学工学なのでマレーシアの化学工学の研究室を訪ねることができてよかった。





4-6-4. 学生交流

マラヤ大との学生交流では言語学科日本語専攻の学生たちと交流することになった。まずマラヤ大に学生 3 人が日本語を学び始めて気付いた点についてのスピーチがあった。日本語を学び始めて 2, 3 年とは思えないほどきれいな日本語で、我々の英語での発表にプレッシャーがかかった。スライドを使って日本と東工大について発表している際は現地の学生は何かしらの反応をしてくれて、黙って発表を聞くことが多い日本との違いを感じた。相互発表後、現地の学生が日本の伝統踊りを披露した後、グループに分かれテーマ、好きな季節や文化の違いを目の当たりにする瞬間などについて日本語と英語でコミュニケーションをとった。マレーシアのスイーツを食べながら談笑し、現地の学生は我々の拙い英語に集中して聞いてくれて楽しいひと時を過ごした。

学生交流の次の日、昨日の学生たちがクアラルンプールを案内してくれた。Petronas Twin Towers, China Town を案内してくれて、さらに交流を深めることができた。

4-6-5. その他

我々はマラヤ大学構内にある Rimba Ilmu という熱帯植物園を訪れた。名前の通り熱帯雨林の植物園で丈の高い草木が多く見受けられた。10 分程度山の中を歩いたが、ラフレシアなどの珍しい植物は見つけられず、蚊が多かったので早く植物園から抜け出したい人が多いようだった。Rimba Ilmu の横には小さな博物館があり熱帯雨林気候ならではの昆虫、植物の標本、写真が展示されていて東工大の学生たちは興味津々だった。



5. その他

5-1. 食事

・シンガポールの食事

シンガポールは多民族国家ということもあり、様々な種類の料理を楽しむことができる。また、町の中心部にも野外のフードコートのような場所がいくつかあり、料金も安いので、シンガポール人は頻繁に外食するらしい。シンガポール料理で有名な食べ物の一つにチキンライスがある。安価でおいしく、自分はシンガポール滞在中に三回食べたが、三回ともお店の看板の絵と若干異なるチキンライスが出てきたので面白かった。(味はめっちゃくちゃ良い)

その他にもラクサ、バクテー、カヤトーストなど有名なシンガポール料理を食べる機会がたくさんあり、食を存分に楽しむことができた。マレーシア料理と比べてそこまで辛い料理はないので、辛い料理が苦手な方でも大丈夫だと思う。

お酒に関してはTiger beerが有名で、後味も良く、シンガポール滞在中はほとんど毎日飲んでた。ただ、SUTDとNTUの学生に聞いたところ、日本みたいに毎週飲みに行くような習慣はないらしく、お酒もあまり飲まないとのことであった。



Tiger beer



バクテー



ラクサ

・マレーシアの食事

マレーシアの料理は辛く米が主食であることが多いという印象だった。マレーシア料理は大きく分けてマレー系、インド系、中華系の3種類がある。多民族国家ということもあり種類が豊富でおいしいものばかりだった。マレー系で有名なのはナシレマ。ご飯、小魚、きゅうり、チキンなどを盛り付けた料理。コンパクトなおにぎり型のナシレマもあった。インド系として有名なのはビリヤニ。スパイス、バスマティ米、豆などを混ぜて作られる米料理。見た目以上にボリュームがありお腹を満たすことができる。中華系で有名なのは福建麺(ホッケンミー)。太麺、豚肉や海老などをしょうゆソースで炒めた麺料理。日本で言うあんかけ焼きそばみたいなもの。また、マレーシアは南国の国ということもありフルーツが豊富だった。強烈な匂いのドリアン、硬い皮のスネークスキンフルーツなどが屋台でたくさん売られていた。ドリアン好きな人が多くて驚いた。

上記で紹介した他にもバクテー、ラクサ、サテーなど非常に美味しい料理が盛りだくさん。シンガポールでも食べられるが、物価が安いマレーシアで食べる方がお得だった。

(ただし、ビリヤニとホッケンミーの写真はシンガポールでのもの)



おにぎり型ナシレマ



ビリヤニ



ホッケンミー



ドリアン



スネークスキンフルーツ



バクテー



ラクサ



サテー

5-2. 町の様子

・シンガポールの街並み

街の美化について

渡航前のシンガポールのイメージといえば、街の美化に対する規制が徹底され、ゴミひとつ落ちていないきれいな街であるというものであった。実際現地ではガムは禁止、タバコについても高い税金が課せられ、なんと交通機関の車内やMRTの改札内においては、禁煙は当然のこと飲食にも罰金が課せられる。それが徹底された結果、交通機関は非常にきれいに保たれていた。

一方、シンガポールではゴミ箱の上に灰皿が設置されている場合、その付近では喫煙が許可されているのだが、街ではそこら中に路上喫煙している人がおり、特に繁華街では灰皿の乗っていないゴミ箱の上に吸い殻が放置されていたり、吸い殻が道路にポイ捨てされていたりすることも多々見受けられた。



図 MRT内の罰則事項

多民族社会の街並み

多民族の暮らすシンガポールでは、その人々の人種や宗教も多様である。したがって街中には教会・モスクといった宗教施設が点在、レストランに関してもハラル専門のレストランもある。また、中華街やインド人街、アラブ人街やマレー人街といった街も存在し、繁華街ともなると各国の店が入り混じり立ち並ぶ光景が見られる。そして街中の文字・放送については、英語の他にほとんどの場合中国語、マレー語、タミール語が併用されていた。

交通について

シンガポールでは自動車には税金や諸費用が上乗せされるため非常に高価であり、人々の輸送を担う主力の交通機関は国の各地に張り巡らされたMRTとバスである。MRTはシンガポールの国を東端から西端まで結ぶEast West Lineのほか、中心街を貫いて国の各方面に伸びる路線が6路線とLRTが3路線存在する。本数も多く、数分に1本の間隔で運転されている。そしてその合間をさらに埋めるような形でバスが多数路線走っているのだが、このバスが、

比較的高い頻度で2階建てのバスが運行され、その需要の高さが伺える。なお、MRTもバスもEZ-linkというICカードで乗車できる。

MRTは日本同様車内放送もきちんとしており、駅のナンバリングもされているので乗車の難易度は高くないように思われる一方、バスの場合、そもそも人気のないバス停だと、バス到着の際に乗車の旨を示すサインを出さないと止まってくれなかったり、車内放送が無いため自分が今どこにいるかきちんと把握していないと降りる場所もわからなくなったりと、初心者には厳しい仕様であった。



図 2 階建てバス

・マレーシア (KL) の街並み

大学の寮に宿泊している間は基本的にそのそばで過ごすことになった。マレーシア 2 日目の夜に寮の近くのショッピングモールへ向かう途中に交通量の多い道路を横断する必要があったのだが、歩行者用の信号機は機能しておらず、交通量が少なくなってきたのを見計らって通行を遮りながら渡らざるを得なかった。シンガポールではできなかった経験であったし、学生に聞いたところ普通らしい。



見てくれだけの横断歩道



案内してくれた際の写真。左から、KLCC、セントラルマーケット、チャイナタウンの通り

最終日にマラヤ大学の学生にクアラルンプールを案内してもらった。2 班に分かれて行動し、私は KLCC 周辺を中心に回った。KLCC 周辺は東京の中心地並みに発展していた。しかし地元の人はこちらにショッピングに来るくらいだと言っていた。KLCC に登ったことのある人はいなかった。モール内の紀伊國屋には日本語の本が漫画から雑誌まで日本の書店並みに売っていたのには驚かされた。

チャイナタウンとセントラルマーケットは、土曜日ということもあってかとても多くの人があった。チャイナタウンには多くの飲食店が並び、観光客や客引きでごった返していた。セントラルマーケットはそのすぐ近くにあるのだが、ここら辺は KLCC 周辺とは異なり高級ショッピングモールというよりは一般観光客向けの露店街と言ったほうがイメージが近いかもしれない。

5-3. ホームビジット

・Y & Mグループ

私は、増田君と NTU の航空宇宙工学科 4 年の Fan Faith さんのお家にお邪魔した。シンガポールで有名な食べ物をご家族の方が用意して下さり、それらを食べながら Faith さんのご両親を含めて日本とシンガポールのことについて色々お話しした。Faith さんと Faith さんの母親が日本に興味があり、何度か日本を訪ねたことがあるとのことだったので、その時に撮った写真と一緒に見ながら、自分たちが説明をできる箇所は適時説明していくという感じで会話を楽しんだ。夕食後は Faith さんが幼少期から続けているバイオリンとピアノを演奏してくれた。ジブリやワンピースの曲など自分たちが知っている曲も演奏してくれて、非常に楽しい時間を過ごせた。Faith さんのご両親は、私たちが英語を聞き取れなかったときはゆっくり話して下さるなど、終始私たちに気を使って下さり、非常にやさしい方たちであった。今回のホームビジットでシンガポールの人々の生の生活に触れることができ、大変貴重な経験ができた。



訪問先の家族と撮った写真

・M & Y グループ

増田と安留はNTUでの授業後、二度目となるホームビジットに向かった。本来は18:10に最寄りの駅で待ち合わせる予定であったが、NTUでのJapanese classにおける学生交流が長引き、またNTUから待ち合わせ駅まで距離があったため、待ち合わせ時間に一時間半以上遅れてしまった。訪問先の学生のSyakurahさんは言語学が好きな大学2年生で、英語日本語マレー語など5か国語も話すことができる。日本語は、過去に日本人観光客の案内をしていたらしく、日常会話ができるレベルである。Syakurahさんはムスリムの家庭なので男の自分たちは長ズボンを履く必要があり、初めての経験で少し緊張していたが、Syakurahさんの家族はとても温かく迎えてくれた。夕食も出していただき、チキンクルマ（カレーみただが、ココナッツで味付けされているので辛くなく、食べやすい）、やパインを辛めのソースで味付けした料理、ベビンカというプラナカンのスイーツといった料理は初めて食べるものばかりであったがとてもおいしかった。今回Syakurahさんの家庭は初めてホームビジットを受け入れてくれたらしく、様々ご迷惑をおかけしたと思うが、家族一同笑顔で迎えてくれた。特にSyakurahさんのお母さんは笑顔を絶やすことなく、自分の下手な英語も誠心誠意聞いてくれ、また自分たちが聞き取りやすいように丁寧に英語を話してくれ、その心優しさに感動せずにはいられなかった。今回、異国のムスリムのご家族と交流できたことはとても貴重な体験だった。かつ人の温かさにも触れることができ、今回のプログラムの中で一番の思い出となった。



御馳走して下さった夕食

・M & Tグループ

本来ホームビジットは夕方にNTUの学生(Evanさん)のお宅を訪問する予定であったが、我々松下・高田の組は彼との事前の話が盛り上がった結果、1日中シンガポールを案内してもらえることとなった。

朝10時にEast West LineのLavender駅で集合し、そのまま彼らが徴兵の際に服などを揃えるミリタリーショップやフードコートへ案内してもらい、名物であるというサトウキビジュースとチキンライスを食べた。その後タクシーでパヤレバ空軍基地に隣接するAIR FORCE MUSEUMに行き、シンガポール空軍の装備や歴史について学んだ。

さらにその後、チャイナタウンに行ってみたかったためタクシーを捕まえようとしたのだが、シンガポールのタクシーは第2通行帯や第3通行帯を走行しているためにサインを出しても路肩に寄せてもらえなかったり、さらにはタクシーによって担当しているエリアが指定されていたりする場合もあるらしく、シンガポール人のエバン君でさえ捕まえるのに1時間近くかかった。チャイナタウンを観光してお土産を買い、集合住宅内のエバン君の自宅にお邪魔した。エバン君のご家族に暖かく迎えていただき、しばらく歓談し、飼い犬のYoshiと遊んだ後にご自宅の1階にあるフードコートで食事をご一緒した。この付近の住人はかなりの頻度でこのフードコートで食事をするらしく、近所の人々との交流の場にもなっているようである。我々はそこで初めてシンガポールの名物であるチリクラブを食べたのだが、これはシンガポールで好きな食べ物の中のトップを争うような美味しさであった。

今回のホームビジットは、ただ観光に行くだけでは分からない現地の方々の生活に触れられる貴重な機会であった。1日中案内をしてくれたEvanさんをはじめ、暖かく迎えてくださったご家族には感謝の念に堪えない。



☒ AIR FORCE MUSEUM



図 Evanさんと飼い犬のYoshi



図 チリクラブ



図 Evan さんのご家族との記念写真

・S & Tグループ

NTU の Calvin 君の家を訪問させていただいた。最寄り駅のカフェで待ち合わせをして家へ歩く道中、Calvin 君がよく行くショッピングセンターを案内してくれた。家に着くとお母さんが夕食の準備をしてくださっていた。Calvin 君は多彩な趣味をもっていて、まず部屋にはカッコいい PC があった。また、筋トレのための道具を使うところを見せてくれた。Calvin 君は日本のアニメをよく見ている、またその主題歌から日本人の歌手についてもよく知っている。お互いの国での生活について聞きあったり、趣味について話し合ったり、楽しく会話をした。しばらくするとお父さんがランニングから帰られた。日本でのマラソンに参加したこともあるそうだ。ご両親は中国語も話せる。中国語で新年のあいさつをすると喜んでくれた。



夕食は 2 種類のチキンライスなどどれもおいしいものばかりだった。普段は外食ですませることも多いそうだ。ということは私たちのために普段はしない料理をしてくださったということで、ますます感謝の気持ちが大きくなった。お母さんは Calvin 君がまだ子供のころ家族で日本に旅行したときの話をしてくれた。その後いただいたシンガポールの伝統的なおかしもおいしかった。お父さんは「若い世代でシンガポールの伝統料理を知っている人はだんだん少なくなっているよ」と説明してくれた。中国、インド、アラブなどなど様々な文化が混ざり合って華やかに栄えていくシンガポールの中では、同時に元来の文化が薄まりつつあるということを私はそのときやっと気が付いた。こうしていろいろな話をしながら食べているとかなりお腹がいっぱいになった。こんなにごちそうしてくださって、ご家族の温かさに本当に感動した。

その後はお腹を休めながら Calvin 君とトランプカードで遊んだ。意外にもババ抜きは知られていなかった。ルールを説明しながら楽しんだ。反対に Calvin 君も私たちが知らない遊び方を教えてくれた。大富豪とちょっと似ている。最後にちょっとしたローカルルール付きのダウトを遊んだ。どれも盛り上がった。そうしてあっという間にもう帰らなければいけない時間になった。シンガポールの終電は日本より早い。

帰りに Calvin 君は最寄り駅まで見送りに来てくれた。本当に楽しい時間を過ごすことが

できて、Calvin 君とご家族には感謝の言葉が言い尽くせない。日本に来る機会があれば、今度は私たちが案内をしてあげたい。

・Y & Tグループ

このホームビジットでは、NTUの男子学生である Poh Wei Tai さんの家にお邪魔することになった。MRTの East-West Line の Tanah Merah 駅で待ち合わせをし、そこからしばらく雑談しながら彼の家へと行った。彼はレベル2の日本語クラスを受講しており、我々は基本英語で会話しつつ、たまに日本語を挟んで、英語で補足しながら会話をした。

彼はシンガポールでは一般的な、やや大型のアパートに住んでおり、ご両親と挨拶した。ちょうどホームビジットを行った日に付近で祭があり、お父さんはそちらに行くということですぐに出かけた。彼のお母さんは以前 Bedok にある日系企業で働いていたためある程度日本語で会話が可能で、日本にも友人がいるとのことだった。また、家庭内では英語と中国語を使用しているという話も聞いた。旧正月のお菓子の余りやドラゴンフルーツをいただきながら4人で会話をした。

次に、彼の最も気に入っている場所の一つだという Marina Barrage に行った。ここは本当に海のすぐそばで、少し内陸側に目を向ければたくさんのビルや、有名な Marina Bay Sands などが目に入り、海には多くの船舶がいた。とても風が強いため風揚げをしている人が多く、また弁当を持ち寄ってピクニックをしている人もいて、中には誕生日パーティーをしたり、結婚写真を撮ったりしている人たちもいた。

その後、彼のお母さんと再び合流して、East Coast Lagoon Food Village で夕食を食べた。多数のテーブルと椅子の周りをたくさんの食品店が囲む形の一般的なフードコートである。夕食後は近くのスーパーマーケットで色々な商品を見て、このときにいくつかのお土産を買ってくれた。最後は車で宿泊先の Village Hotel Bugis まで送ってくれて解散となった。

このホームビジットではシンガポールでの生活や彼の将来の展望などについて多くの会話をし、有意義な時間を過ごすことができた。ホームビジットを快く受け入れ、我々を歓迎してくれた Poh Wei Tai さん一家には感謝してもしきれない。

・R & Y グループ

私のグループ（山内、りゅう）はMaverick 家に訪れることになりました。とは言え、お家のキッチンが壊れたらしくて、外食しました。香港料理の店に入って、座席に待っているのはMaverick の両親でした。本格的な中華をいただき、周りを観察したら、ほぼ皆中国語もしくは中国の方言で喋っている。Maverick の両親は両方シンガポール生まれですが、やはり住んでいる町に中華系の人は大部分でした。食後、山内さんの要望に沿って、Maverick と3人でMarina bay carnival とカジノに行きました。お父さんはカーニバルの会場まで車で送っていただきました。二時間の間は決して長くないが、それなりに全力を尽くして招待してくれたMaverick 家に感謝の気持ちしかありません。

・K & T グループ

私達は、NTU 電子工学科のTay Yun Jie (Tammy) さんのお宅にお邪魔しました。Lakeside という MRT の駅から5分ほどの集合住宅の上層階で、クーラーは見受けられませんでした。風通しのよく、すごしやすいお宅でした。年に一回は日本に来られるほど日本好きな方で、日本に来た時に買ったお菓子を用意して頂くくらい暖かく迎えてくださいました。MILO DINOSAUR というシンガポール独特の飲み方でMILO を頂きながら、専攻などの話をしました。その間にTammy さんのお母さんが夕食の材料を買ってきてくださり、フィッシュヘッドカレー、ポピア、サテ、チキンを煮たものなどシンガポール料理を振る舞ってください、Tammy さんのお父さんも加わって5人で夕食を頂きました。辛い物が苦手な私にあわせてくださり、とてもおいしく頂きました。その後日本のおすすめの場所やシンガポールの話が盛り上がり、終電をのがしてしまいましたが、車でホテルまで送っていただきました。Tammy さんにはその次の日も午後いっぱいシンガポールの市街地を案内してもらったり、その後2日間夕食を一緒に食べたりと大変お世話になりました。最後にはとても仲良くなることができ、別れるのがとても惜しかったです。



・Y & S & T & S グループ

3月12日の夜、4人で南洋理工大学の生徒 Koh Su En さんに誘われて、家に参りました。一緒にも KOH SU EN さんの3人の友達がありました。Janet、Tan と Koh さん、3人とも南洋理工大学の学生です。Koh Su En さんの家で、晩ご飯をご馳走しました。料理はシンガポール風のカレーと魚生という料理です。カレーを作ったのは Koh Su En さんのおばあさんです。一杯ご馳走になって、最後は食べきれませんでした。美味しかったです。その後持ち出された魚生という料理はこんな感じです。これは結構伝統的なシンガポール料理です。旧暦の新年を迎える時で食べる料理で、40年ぐらいの歴史がありました。私達全員がスプーンを一個持って、料理を混ぜました。こんな感じになりました。サラダのように爽やか感じがします。



次は食べる時皆の写真です。ちなみに青いTシャツを着ているのは私ですが、断じて目を瞑ってはいません。目が小さいだけです。



晩ご飯の後は帰るのついでに、Koh Su En さんの住まいの近くのスーパーに寄りました。私はそこで chili sauce をお土産として買いました。その後 Koh Su En さんはバスまで乗って私達を駅まで見送りましたし、電車を利用する彼女の友達も私達が無事に電車に乗ってから自分達の電車に乗りました。感激です。ありがとうございます。

以上は私達のホームビジットの流れです。楽しい一夜を過ごしましたし、初めて外国人の家に訪ねるのも新鮮でした。





6. 所感

・JY

「留学しないまま卒業して良いのか？」ダメもとで申し込んだ留学でしたがプログラムを終えた今となっては留学できて良かったと思っています。そもそもこのプログラムを申し込んだ理由は①日本より先進国に行くことができる②2 か国行くことができる③初めての海外留学を経験できるというものでした。

実際に行ってみてシンガポールは本当に発展している国だと感じました。Uber が流行、交通量制限、スーパーのレジの自動ベルトコンベア・・・最先端の技術が詰まっていました。また、ホームビジットという貴重な体験をすることができました。現地の学生の家に向うということは学生の内にしかできないことだと思います。シンガポールの学生は英語、中国語、日本語を話すことができたのでレベルの高さを感じました。できる言語が多いと入ってくる情報量が倍になるということがわかりました。そして、現地の学生やご家族の方々は文化の異なる私たちに対して親切に温かくもてなしてくれました。シンガポールの人たちは「夕食は家族で食べる」という概念があるので温かい家庭が多いのではないかと思いました。また、ホームビジットの2 件目で中国の新年お祝い行事を初めて経験しました。異文化の理解促進につながりました。

マレーシアは発展途上であり勢いのある国だと思います。物価が安くて食べ物がおいしかったです。しかし、建物の建付けやトイレの詰まり等を考えるとまだ発展途上であると感じました。マレーシアの学生は言語学科ということもあり、日本語は完ぺきでした。日本語を学んでいる学生は本当に日本が好きなのだということが伝わってきました。私より日本の文化に詳しくだったので自分ももっと日本の歴史や文化を理解して説明できるようになるべきだと反省しました。

今回は日本にはできない貴重な体験ができました。このプログラムに参加できて良かったと心から思います。現在留学行くかどうか迷っている学生にぜひ参加してほしいです。また、メンバーにも恵まれたおかげで楽しく過ごせました。協力してくださった皆様、本当にありがとうございました。

・ SM

今回参加した超短期派遣プログラムについての所感について述べる。

・ シンガポール、マレーシアでの生活について

私は今まで東南アジア諸国に行ったことはなかった。日本の近くにありながら環境がどう違うのかを実際に経験したいという思いが今回のプログラムに申し込んだきっかけの一つだった。まず始めに思ったこととして、現地は自分の予想を超えて気温が高く外では過ごしにくいということだった。企業訪問をした際に現地の日本人職員の方々はシンガポールの治安がよいので住みやすいと仰っていたが、自分の中ではあの気温と湿度が年中続くと思うと、とても住み良いとは思えないなという印象だった。対照的に建物内部が寒いのも強く記憶に残っている。あのような寒暖差で毎日を過ごせばすぐ身体を壊すのではないかと思った。飲み物に関して、水は安いものの水道水が飲めないことや、お酒が高い点において日本との違いを感じた。移動手段に関して、シンガポールでは電車やバスが十分に発達しているなと感じた。食べ物に関しては主に「辛い」か「甘い」味付けが多く、極端である印象が強かった。ただチキンライスには味付けが薄く食べやすかった。毎日の予定がタイトで、あまり観光している時間がなかったのが少し残念ではあった。

・ 学生交流について

迎えてくれた学生さん全員がとても優しく、楽しい時間を過ごせた。わざわざ時間を割いて、現地のおいしい料理が食べられるお店やショッピングに連れ出してくれたりして、とても感謝している。交流したのは主に日本語を学ぶ学生さん方だったが、日本での留学経験を持つ方も少なくなく、流暢に日本語を喋り、日本が本当に好きなんだなあと感じた。それに比べて自分の喋る英語は拙く、少々不甲斐ない思いもした。しかし、現地の学生さん方は優しく耳を傾けてくれたので、英会話を練習する貴重な機会をたくさん得られた。また、現地の学生さんたちはとても勤勉で優秀だと思った。アルバイトをあまりせず、土日も勉強することが多いと聞いて、海外の学生が優秀な理由が少しわかった気がした。また、共に行った東工大のメンバーも様々なバックグラウンドを持つ学生で、刺激をもらいながらも友好をふかめることができよかったと思う。

最後に、このようなプログラムを企画して下さった大学のスタッフの方々、引率して下さった間中先生、早川先生、栗山さん、一ノ瀬さん、そしてお世話になった現地の学生さん方や企業の方々、もちろん行動を共にした参加メンバーに感謝の意を表し、所感といたします。

・TY

今回の派遣では、予想以上に様々な体験ができ、多くのことを感じさせられた。ここでは、その中でも特に印象に残った以下2つのことについて述べてみたい。

1つ目は、自分の英語についてである。もともと自分が今回の派遣に応募した理由として、英語スキルの向上が挙げられる。自分は大学院の間に2~3か月程度の研究留学がしたいと考えており、英語圏でちゃんと1人で生活できるかということを確認するために今回の派遣に応募した。結論から言うと、今のままではまだ難しいかもしれない。リスニング能力に関しては、現地の人からゆっくり話してくれる場合は理解できた。しかし、現地の人どうしの会話スピードには全くついていけなかったし、話の流れとはまったく関係ない不意な質問などには対応できなかった。スピーキング能力に関しては絶望的だったと思う。言いたいことが伝わらなかったことはあまりなかったが、自分の言いたいことをいちいち脳内で英語に変換しなくてはならず、またそのスピードが絶望的に遅いため、自分の言いたいことが整理できたころには別の話題に移っている、なんてことが多々あった。英語をもっと頑張らなくてはいけないと痛感した。特に、スピーキング能力を向上させるために、英語を使う機会を日常的に増やさないといけないと思う。

2つ目は、現地の学生についてである。今回の派遣ではほんの一部の人（しかも日本に興味のある人）としか会っていないため、これがシンガポール人、マレーシア人の性格であるとは一括りにするべきではないと思うが、みんなとても親切だった。自分の拙い英語をなんとか理解しようと聞いてくれたり、プログラムの学生交流の後は、夕飯や市内見学に連れて行ってくれたりした。多くの学生が日本への留学や旅行を予定していたので、そのときにはまた会ってお礼がしたい。

最後に、お忙しい中引率して下さった間中先生、早川先生、栗山さん、一ノ瀬さん、それから一緒に学んだ派遣メンバーのみんなに深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

・XS

3月7日から18日の間で、私は今回の超短期留学派遣プログラムによって、シンガポールとマレーシアを訪ねました。貴重な体験を頂いて誠にありがとうございました。最初の7日間でシンガポールに居て、残る3日間はマレーシアということです。

シンガポールに到着したの翌日、私達はシンガポールのパナソニック会社に訪ねました。あそこでパナソニックの会社歴史、会社理念、戦略方向と若人社員の経験を聞きました。大きい会社の気概を感じました。その後私達はシンガポール国立博物館を訪ねて、シンガポールの歴史を学びました。

次の日、私達はシンガポールデザイン工科大学を訪ねました。この大学は結構新しい大学なので、キャンパスツアーの途中で、東京工業大学に比べて斬新なものはよく見かけました。午後は日本語教室の学生と楽しく交流して遊んでました。

週末はタウンウォークで、泊まっていたホテルの近くの街についてシンガポールのガイドさんに案内されました。

週明けの月曜日から水曜日はシンガポールで有名だけでなく、世界中でも知られている南洋理工大学を訪ねました。1日目はキャンパスツアーと日本語教室の生徒と交流して、その後私は南洋理工大学の生徒の家にホームビジットをしました。今まで味わったことがない新鮮感です。2日目と3日目は実験室の見学と授業の受講を体験しました。東京工業大学との授業方法と実験室の違いを感じました。

南洋理工大学を訪ねた直後、私達はマレーシアに行きました。当日の夜はマラヤ大学の国際ハウスに泊まりました。翌日はマラヤ大学の実験室の見学をやりました。移動の時、マラヤ大学のキャンパスは広いので、車で移動しました。南洋理工大学も広いのでバスでの移動も可能ですが、体験はできませんでした。なので、マラヤ大学で車の移動を体験できて良かったです。マラヤ大学での2日目は授業の受講を体験して、日本語教室の学生と交流しました。その後私達はクアラルンプールのホテルで一泊泊まって、17日の夜飛行機を乗って、18日の早朝日本へ戻りました。

今回の留学体験では、シンガポールとマレーシアの生活を体験しました。最初の4日間は結構自由時間は多かったのですが、週明けしたら一気にコンパクトになって、結構大変でしたが、充実しました。この留学プログラムを通して、外国のことを知るだけでなく、チームワークの大事さも感じました。もし良いプログラムがあればまた検討します。他の人にも勧めます。

・YT

今回のプログラム参加は私にとって初の海外渡航でもあったので、正直渡航前は期待よりも不安のほうが大きかった。しかし、このプログラムを終えて振り返ってみると、それを超える刺激と貴重な体験に満ち溢れていた。

まずシンガポールについて、特に私の印象に残ったのは現地の学生との交流であった。我々はSUTDとNTUの2つの大学へ行き、アジアトップレベルの学生と交流することができたのだが、学生たちの圧倒的な勤勉さと知識の豊富さに圧倒された。実際に彼らに聞くと、勉強が忙しく趣味に割くための時間がほとんど無いのだという。大学の設備も日本の大学よりもはるかに立派な設備が揃っており、シンガポールという国が学生にかける期待と、その期待に応じて大学で学び、国を担っていこうという彼らの熱意を感じた。

次にマレーシアについて、私が素直に感じたのは、誤解を恐れずに言えば都市化する街と人々の意識の差のようなものであった。街には高速道路や高層ビルが立ち並び、空き地も工事中のところが多く、道路は多くの車で混み合い、その姿はいよいよ先進国に向かう都市の様子であった。しかしそこに住まう人々について言えば、交通ルールはあっていないようなものであったり、ゴミがその辺に捨ててあったり、時間にはルーズな感じがあったりと、人々の意識が街の発展に追いついていないという印象を受けた。しかしこのあたりはいずれ解消されて行き、マレーシアもさらなる成長をするのであろうと思う。

そして特に印象深く、忘れられない思い出となったのが、SUTDで仲良くなったとある学生との話である。私は彼とずっと疑問に思っていたことを思い切って聞いてみたのである。「我々は国立博物館で戦時中に日本がしてきたことをあなた方の視点から見た。このような歴史があった上であなた方は日本をどう思っているのか」と。彼の答えは、「今の日本は以前の日本とは違うものであると教わった。シンガポールは多民族多宗教の国でありお互いの違いを受け入れる国であって、今の日本のことも受け入れている。今の日本に昔の日本のしたことを謝罪しろと言ったり、憎しみを持つといったことはない」といった内容のものであった。これは当然彼自身の見解であるし、実際我々は国立博物館でガイドの方から一部のシンガポールの人々が今でも反日感情を持っているということも聞いた。しかし彼は日本のことをとても良く思ってくれていた。そして今回のプログラムで出会った人々は皆我々を暖かく受け入れてくれた。このことは我々にとってだけでなく、日本にとって非常に貴重でありがたいことであると思う。

もし今回のプログラムに参加していなければ、私はこのような意識をはっきりと持つことなく生活していたかもしれない。自分で調べて現地の人々の意見を知るよりも、彼らに直接言ってもらう方がはるかに価値のあるものである。

最後に、この貴重な経験ができたことについて、引率の先生がたをはじめ、現地で出会った学生や企業の方々、超短期派遣プログラムでどこの国に応募しようか迷っていた時に、「シンガポール・マレーシア昨年参加しましたけどめっちゃよかったですよ！」と推してくれた写真研究部の後輩に感謝したい。

・YM

今回このプログラムに参加した目的は英語力を向上させるきっかけを作ることと、現地の大学に訪問し、学生と交流することで刺激を受け、今後の自分の糧にすることにありました。

そもそも大学に入ってから、絶対に留学に行こうと思っておりましたが、実際は思うように時間をとることができず、また実際に行動に移すきっかけも作れずに3年生になってしまいました。3年の春休みが最後のチャンスだと思い、思い切って参加することにしました。しかし、入学以降積極的に英語の勉強をしていなかったためか、英語力はここ2~3年で最低レベルに落ちていたので春休みに集中講義などを積極的にとって留学に臨みました。実際、1~2か月の頑張りでも英語の向上はあまりなかったと思いますが、一連の取り組みを通して英語への学習のモチベーションは上がったと思います。

一方で今回のプログラムで最も新鮮だったことは現地学生との交流でした。海外に行った経験は過去にもありましたが、毎日のように新しい人と出会い、交流を深められた今回のプログラムは刺激的でした。自分は英語が苦手でしたが、現地の学生は自分が考えて発言するのを待ってくれたりして、とてもやさしかったです。特にホームビジットではこのプログラムがなかったら出会うことのない学生とそのご家族と交流し、言葉は十分に通じなくても人の温かさを感じることができ、自分にとってとても大事な経験となりました。

現地の学生はもちろんのこと、一緒にプログラムに参加した東工大のメンバーと引率の方々もみな個性的で面白く、退屈することのないメンバーでした。

今回のプログラムをラストチャンスだと思っておりましたが、実際は自分より上の学年の人も沢山いたので、また今後も新たに海外派遣プログラムに挑戦をしたいと思います。また海外学生との交流を通して将来の進路の視野も広がりました。このようなプログラムを作ってくださったスタッフ陣及びメンバーに感謝申し上げます。ありがとうございました。

・YY

今回のプログラムに参加した理由は、近年急激な進化を遂げるシンガポールの大学が実際にどのような大学であるのかを自分の目で確かめること、また、シンガポール、マレーシアの二か国を訪れることで自分が将来海外で働くときに、これら2国にちゃんと適応していけるかを確認することの2点であったが、当初の目的を達成できたように思う。

まずは、シンガポールの大学についてだが、講義が英語で行われているだけで内容自体は東工大と変わらないように思えた。それよりもそこで学んでいる学生のレベルが東工大よりも高く、卒業後の進路など将来設計がはっきりしている学生が多かった。また、SUTDの日本語クラブの学生の日本語力が非常に高いことに驚いた。何人かの学生は、日本に行ったことが一度もなく、アニメや漫画から独学で学んでしゃべれるようになったと言っていた。私はこれまで語学留学を含めて何度か海外に行ったことがあるが、未だに英語を上手に話すことが出来ない。今回 SUTD の学生と会ったことで、今まで自分がいかに怠惰であったかを思い知らされた。

2つ目の目的に関しては、シンガポールとマレーシアを訪れてこれらの国で働くために自分が今後どのような準備をしていけば良いかをしっかり認識することができた。また、今回のプログラムを通して、インターネットで調べるよりも実際に自分の目で確かめたほうが良いことを学んだ。シンガポールを訪れる前は、事前学習で多民族国家であることを学んでいたが、実際にシンガポールを訪れることで、多民族国家がどのようなものであるかをしっかり理解することができた。

今回のプログラムでは本当にたくさんのことを学ぶことができたが、同時に、シンガポールの学生のレベルの高さを目の当たりにして自分はこのままだと今後生きていけないと感じるほど非常に大きな危機感を覚えた。私は4月から研究生活がスタートするが、何事にも全力で取り組み、悔いの残らないように日々精進していこうと思う。

・TK

私は高校生の頃から、将来なんらかの形で長期的に海外で暮らしてみたいとなんとなく思い始めました。しかし何か具体的な考えはなく、積極的な行動を起こすわけでもありませんでした。こ以前に海外に行った経験は何回かありましたが、行ったとしても行ったっきり、その後の関わりは一切ありませんでした。しかし、大学に入って少しずつ自分のやりたいことが見えてくる中で、何かもっと自分の将来に関わるものを得るために海外に行きたいという思いが強くなり、今回の超短期派遣に申し込みました。その中からこのプログラムを選んだのは、南洋理工大学に以前から興味があったことが大きいです。

結果、今回のプログラムは私にとって大変意義深いものになりました。理由は二つ。一つは、他国の大学やそこにいる学生の生活をほんの少し覗けたことです。まだまだ力は足りませんが、もっと長期的に別の大学に行って見たいなと思わせてくれるものでした。今後自分の学びの場を探す際に、もっと外に目を向けてみようと思いました。

二つ目が私にとって最も大きな収穫でした。それは現地の学生との交流です。年の近い学生たちに現地を案内してもらったりご飯を食べながら話をすると、観光では見れない町の姿が見えたり、思いもしないところから文化の違いを感じたり、学生としての質の差を感じたり…。何より楽しいです。海外に友人ができたのは本当に嬉しかったです。

今後海外に行く機会があれば、今回の経験は必ず活けると確信しています。どんな道に進むにしろ、この経験を糧にして一步一步努力していきたいと思います。このプログラムに参加して本当に良かったです。今回のプログラムをお手伝いいただいた全ての方々にこの場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

・SS

去年のフィリピン超短期派遣に続き、今年はシンガポール、マレーシアの派遣に参加させていただいた。フィリピンの時より自由時間が多く、プログラム外では大学見学の時に知り合った現地学生に案内してもらえ、学生交流をより深くすることができた。学生交流をしている上で一番刺激になったのは現地の学生の語学力の強さである。シンガポール、マレーシアともに公用語が複数あるということで2、3か国語話せるのは普通で、さらにマラヤ大の日本語クラスの学生たちは5、6か国語話せるという人たちばかりだった。日本語を学び始めて2、3年という学生も我々と十分にコミュニケーションをとれる程流暢に話すことに驚いた。我々は普段日本語しか使わないが、長期留学を将来考えているので今以上に語学の学習をしようと刺激をもらった。

参加した目的の一つは世界大学ランキングの上位の大学を見学するためであった。NTUは欧米の大学のイメージのような円卓形式で講義行っている教室が多くみられ、日本の講義形式との違いを感じた。大学内の図書館を訪れたときは勉強している学生ばかりで、東工大の図書館内の景色とはまったく違った。ほかに3D Printingの研究室を見学させてもらったが高価な装置が何台も見られ、勢いを感じた。

NTU、マラヤ大それぞれで講義に参加させてもらったが、先生の話す英語はほとんど聞き取ることが出来なかったが、学生交流の時は積極的に会話に入ることが出来、去年からの成長を実感できた。大学見学で自分に足りない物が分かりとてもよい経験だった。

マレーシアは治安が悪いといわれていたが、シンガポール、マレーシアと通して先生方や現地の方々のサポートのおかげで無事終わることが出来た。この留学を次の長期留学などに活かしたい。ありがとうございました。

・KT

初めての留学でしたが、非常に満足しています。特に現地の学生と話す中でシンガポールでの生活がいろいろとわかるのが楽しかったです。2回のHome visitはどちらも素晴らしい体験となりました。英語は完全に翻訳できなくても何とかできました。シンガポールやマレーシアには中華系の方も多く住んでいるので、交流する中では第二外国語として1年間だけ勉強した中国語が役に立つこともありました。また、多くの学生が日本に興味を持って日本語や日本文化を勉強していることを知り、私自身もそれについて詳しく知っておきたいと思いました。振り返ってみると、言語に対する見方は少し変わったかもしれません。つまりその言語を用いてさらに自分を表現したい、人を理解したいという動機のもとで勉強するようになりました。

シンガポールについて新たに知ったことは数え切れません。街中での常識は日本のものとは大きく異なりました。交通や通信は十分高度なもので、助かりました。現地で働く日本人の方のお話も参考になりました。様々な文化が混ざり合っただけでできた社会はお互いの文化を尊重しあって共存していました。全体を通してみると、遠慮しすぎる必要がないというのが、私にとっては最も衝撃的でした。これらを直接見て感じる事ができて本当に良かったと思います。機会があればまた行こうと思います。

最後になりましたが、引率の先生方とメンバーのみなさんには大変お世話になりました。おかげで毎日楽しく過ごし、貴重な体験を共有することができました。本当にありがとうございました。

・YT

この留学プログラムが初の海外渡航であり、不安もあったが、問題が起きることはなく、また刺激的で強烈な体験となった。

このプログラムに参加した理由の1つは、自分のコミュニケーション能力(英語での会話技能を含む)がどれほど通用するのか気になった、というものがあつた。この点について私はある程度の自信を得ることができた。現地学生との交流では、日本語クラス受講者とのコミュニケーションだったが、相手のレベルに合わせた日本語を使うこと、必要に応じて英語で補足するか、会話全体を英語にするなどの、意思疎通に必要な行動が取れた。また、英語での講義聴講では、完全に聞き取ることはできなかつたが、英和辞典を引いたり、資料を参照したり、自分の知識を使用したりして補完できる程度に聞き取って理解することができた。これらから、自分のコミュニケーション能力が最低限必要なだけは鍛えられていることを確信できたとし、また今回の渡航を通してそれを鍛えることができた。その一方、より語彙やリスニング能力を高めなければより高いレベルの講義は理解できないだろうという思いも生まれ、今後の学習への意欲が増した。英語だけでなく日本語も使った、複数言語を用いたコミュニケーションという体験も自分にとっては新しく、刺激的だった。

シンガポールとマレーシアは異なる文化背景を持つ複数の民族が共存する国家であり、その多文化共生がどのような仕組みで成り立っているのかを知ることもできた。宗教が違うという大きな断絶を乗り越えるシステムと心持ちがこの国々にはあつた。今後の新しい社会(グローバル化社会、ポスト・グローバル化社会)のヒントとなるだろう。

初の海外ではあつたが、多くの人々とコミュニケーションを取り、何人も友人ができた。今後他の国へ渡航し、様々な刺激を受けたいと思うと同時に、またシンガポールとマレーシアに行き、より深い体験をしていきたいとも思った。このプログラムは私の海外への興味を爆発させ、今後の可能性を広げてくれたように感じる。今回参加して本当によかつたと思うし、引率の先生方、現地でご尽力くださった関係の方々、交流に参加してくれた SUTD、NTU、マラヤ大学の学生たちに感謝している。

・YL

私の生まれ育ちは台湾で、大学は日本ですが、どの国も島国で単一民族国家と分類されています。ですので、多民族国家のように異なる人種と向き合う機会は少なかったです。多民族国家の代表であるアメリカにおける人種問題の記事を日々様々なメディアから受け取っていますので、平和な多民族社会はかなえない理想論に過ぎないではないかと疑問を持ちました。

今回の派遣の際に、Chinatown、Geylang Serai、Arab Street、Little Indiaといった民族の町に訪れました。ChinatownとArab Streetはものすごく観光向けになっていて、中華系とアラビア系の人々が住んでいるかどうかはちょっと怪しいですが、Geylang SeraiとLittle Indiaは見た様子から、間違えなくマレー人とインド人が日々生活している町です。面白いことに、シンガポールの国土は決して広くないため、このような各民族の町は互いに思ったほど離れていなくて、電車で2、3駅程度です。こうやって民族ごとに住処を持つことはどういう意味を持つか、私なりに考えました。おそらく、皆は各自のコンフォートゾーンに逃げたのではないのでしょうか。英語という共通語があるといえども、やはり母国語の話せる人達に親近感を持つのではないのでしょうか。極端に言えば、シンガポールで英語が話せなくても不自由がなく暮らせるでしょう。ローカルが行きそうなインド料理屋さんにて夕食をいただいたのですが、やはりインド人っぽい人しか見当たりません。話が飛びますが、現在、インドやバングラデシュなどから多くの建設作業員が低賃金で出稼ぎにきているようですが、いずれ大きな社会問題に発展してもおかしくないでしょう。

タウンウォークのガイド、Swee Linは中国福建省の出身です。彼女は流暢な英語でこう言いました。「私は福建語が大好きで、福建人として誇りを持っています。」「南インドからの人々がいなければ、今あなたたちが見ているすべての建物も存在すらしなないでしょう。彼たちは建設を通して、この国を支えてきました感謝されるべき人達です。」私は驚きました。彼女の言動から、自分自身の文化を大切にしながら、他の文化を尊重しようという気持ちが伝わってきました。このようなすばらしい考え方が広まっていけば、平和な多民族社会が築かれるかもしれません。

・A0

小学生の家族旅行以来初めての海外で食事やコミュニケーションなど不安な面も多くあり、私にとっては冒険であったが、大学生の早い時期から積極的に留学体験をしてみることが将来多くの場で必要とされるであろう英語を身に付けるためには大切であると思いこのプログラムに参加することにした。

私は超短期プログラムでシンガポールとマレーシアを訪問し現地の大学の講義を受けたり、大学生と交流することができた。また、その日のプログラムが終わった後に観光名所を回ったり、地元の料理を食べに行くこともできた。この地域の料理には香辛料が使われているものが多く、私は辛い食べ物があまり得意ではないため少し心配だったが、辛いものでもとてもおいしいものがあったり、少し辛いものであっても挑戦してみたりと食事を楽しむことができた。さらに時には現地の学生に街を案内してもらったり、食事に連れて行ってもらったりと貴重な体験をすることもできた。

今回のプログラムでは現地の学生と交流する機会が多く与えられており、初めは英語が苦手な私でもコミュニケーションをとることができるのか不安だったが、学生は積極的に話しかけてくれるだけでなく、私が伝えたいことを理解しようとしてくれたこともあり仲良くなることができた。学生にキャンパスを案内してもらったりゲームで遊ぶこともできてとても楽しかった。その一方で、自分の英語でのコミュニケーション能力について考えさせられることも多かった。自分から現地の学生に質問したり話しかけた際に、相手の返事や会話を聞き取ることができずあいまいに笑うことしかできず話が続きなくなってしまったこともありその時はとてももどかしく感じた。

日本にいて普通に暮らしていると日常生活で英語を使う機会はほとんどないため、今回の短期留学は英語を話さなければならない環境で過ごすことによって自分の英語能力を知ることができたという意味でもとても有意義なものであったと思う。英語でのコミュニケーション能力を上げるために大切だと私が考えることは日常的に英語を使うことと英語で話すことのできる話題の範囲を増やすということである。特に私はリスニング能力が劣っていると感じたので意識的に英語を聞く時間を増やし英語を聞くということに慣れていきたい。また、外国人と会話するうえで日本や東京で有名なものや場所についてや、自分の専攻、趣味などについて基礎的な知識を持つておくことで会話を続けることができるようになると感じた。今回の海外留学を通して多くのことを吸収することができ、外国人と交流することや英語で話すことに興味を持つようになった。今後もこのような留学プログラムに積極的に参加し、英語に触れる機会を増やしていきたいと思った。

・ST

最初に思うのは、本当に楽しかったということです。到着してすぐのころは、疲れて観光に行く余裕がありませんでしたが、徐々にメンバーと仲良くなり、動物園に行ったり、市街地に行ったりと、シンガポールの様々な場所を見ることができました。メンバーは一番年下で勝手の分からない私にも優しく仲良くしてくださり、よい人達に恵まれたと思っています。

企業訪問は日本とシンガポールの働き方の違いを知る貴重な体験になりました。日本よりもシンガポールの方が、会議の進み方が速いというお話が中でも印象的でした。大学訪問では、各国の違いを見ることができたので面白かったです。また、これは今回のプログラムで一番驚いたことなのですが、両国とも現地の人がとても優しく、とてもフレンドリーでした。現地の学生との交流を通して、いかに彼らが自分の大学や国、他国について知っていて、いかに専門を熱心に勉強しているかを知ることができました。NIU を案内してくださった Darren さんはシンガポールのことを、マレーシアを案内してくださった Mirah さんは専門の日本のことをよくご存じでした。彼らの語学力にも驚きましたが、東工大や日本、海外のことを全然知らない自分に気づき、愕然としました。

タウンウォークやホームビジットもシンガポールの歴史や実生活を知る貴重な体験でした。タウンウォークで街を案内してくださったスーリンさんは、現地の人でも知らないような話をしたり、お菓子をくださいました。ホームビジットで私達を受け入れて下さった Tammy さんには、現地のご飯だけでなく、ここでは語りつくせないほどのたくさんの思い出を頂きました。

Tammy さんやスーリンさん、Darren さん、Mirah さんをはじめとする現地の方々、引率してくださった間中先生、早川先生、栗山さん、一ノ瀬さん、そして一緒に旅をしたメンバーには感謝の気持ちでいっぱいです。今回の旅の様々な体験を通して得た知識や気づきは、私の考え方を変え、これからの人生に深く影響を与える大切なものになったと確信しています。そのような機会をくださり、ともに時間を過ごしてくださった皆様、本当にありがとうございました。